

P2-37.

*肺腺癌におけるがん幹細胞マーカーの発現と肺腺癌分類に基づく predominant subtype、予後との関連

(外科学第一)

○嶋田 善久、野村 将春、吉田 浩一
垣花 昌俊、梶原 直央、大平 達夫
池田 徳彦

(人体病理学)

松林 純

【背景】 自己複製能/多分化能という特徴的な性質をもつがん幹細胞 (CSC) は、腫瘍を構成する細胞階層の頂点に存在し、がんの転移/再発に関与するとされる。CSC マーカーは CSC 分画の濃縮に必要となる。一方、肺腺癌で浸潤癌は predominant subtype (PS) による分類が提唱された。【目的】 肺腺癌における CSC マーカー発現と PS、予後との関連を明らかにする。【対象と方法】 対象は 1999-2002 年に完全切除された 104 例。CSC マーカー (AL1A1、AK1C1、AK1C3) の免疫染色を行い、切片上 5% 以上の腫瘍細胞での発現を陽性とし、CSC マーカーの発現、臨床病理学的因子について生存解析を行った。また腫瘍を構成する組織亜型で最も占拠率の高いものを PS とし、CSC マーカーの発現との関連を検討した。

【結果】 病理病期 I/II/III/IV: 79/12/11/2。AL1A1、AK1C1、AK1C3 の陽性率は 66%、63%、86% であった。腺癌の PS の内訳は非浸潤癌 (NI) 19、浸潤癌 83 (lepidic growth (L) 2/papillary (P) 39/micropapillary (MP) 5/acinar (A) 10/solid (S) 27)、その他 2 例。AL1A1 発現は S に比較して P で有意に高く ($p<0.05$)、AK1C1 発現は P、A と比較して P で有意に高かった ($p<0.01$)。生存解析では、CSC マーカーのうち AL1A1 発現のみが有意な予後因子であり (+/-: 5 生率 78/62%; $p=0.002$)、多変量解析でも血管浸潤 ($p=0.037$)、リンパ節転移 ($p=0.007$) と同様に AL1A1 発現 ($p=0.001$) は独立予後因子であった。

【結論】 肺腺癌において AL1A1 発現は最も強い予後因子であった。PS によって各々の CSC マーカーの発現は異なり、生物学的特性が異なることが示唆された。

【備考】 本研究は平成 24 年度東京医科大学研究助

成金による研究である。

P2-38.

R-CHOP または R-CHOP like regimen にて治療した高齢者 Diffuse large B-cell lymphoma における予後不良因子の検討

(八王子: 老年病科)

○酒井 稔、阿部 晋衛、金谷 潔史

(老年病学)

高田 祐輔、赤井 知高、菊川 昌幸
岩本 俊彦

【目的】 Rituximab (R) 登場以降、Diffuse large B-cell lymphoma (DLBCL) の予後は劇的に改善している。一方、R 登場以前の予後不良因子として、non-GCB subtype を示す症例や、EBV 陽性例が報告されている。今回、当科にて治療した中央値 80 歳の DLBCL において R を含む化学療法が、これら予後不良因子を有する症例の予後を改善し得たかを後方視的に検討した。

【対象と方法】 当科にて治療した DLBCL 60 例。年齢 74-89 歳、中央値 81 歳。R-CHOP 25 例、R-THP-COP 29 例、Best supportive care (BSC) 6 例。初診時のリンパ節または節外病変により得られた病理組織を用い、bcl-6、MUM-1、CD10 の発現の違いにより GCB subtype と non-GCB subtype に分類した。また EBV は EBER 染色にて検討した。

【結果】 高齢者 DLBCL では non-GCB subtype が多く、また一部の症例で EBV 陽性例が確認された。R を含む化学療法で GCB subtype と non-GCB subtype の予後は同程度であったが、EBV 陽性例の予後は依然不良であった。

【結論】 予後不良因子を有する DLBCL の一部の症例で、高齢者でも R-CHOP または R-CHOP like regimen にてその予後が改善する可能性が示唆された。